

〈翻訳〉

フランケ

『学校規則，特にドイツ語学校で守らねばならないこと』

Schulordnung, Was insonderheit in den deutschen Schulen zu observieren, 1702

菱刈 晃夫

前回に引き続き、アウグスト・ヘルマン・フランケ（August Hermann Francke, 1663-1727）による著作からの試訳を掲載する。今回は、学校規則の抜粋である。原典は以下によった。Francke, A.H. : Pädagogische Schriften, Besorgt von Hermann Lorenzen. Paderborn 1957. S.67-87.

*

学校規則（抜粋）

VI.

これらの学校のすべての子どもたちは、週のすべての日、午前と午後の両方と、日曜日の説教の前後にも学校に来るように勧められる。これにより彼らは常に適切に指導され、より規律正しく教会や祈りの時間に導かれる。なぜなら、ほとんどの学校で通常水曜日と土曜日が休みで、日曜日にはどこにでも行ってよいとされている場合、彼らが週の間に学んだことはほとんど台無しになり、むしろ非常に散漫になり、しばしば非常に乱れてしまうからである。すると教師たちは、週が明けて学校を再び元の秩序に戻すのに多大な苦勞をすることになる。こうした災難に対処するため、前述のように、これらの子どもたちは毎日学校に通う必要がある。

VII.

これらのすべての学校のもっとも重要な目的は、子どもたちが何よりもまず、生き生きとした神とキリストの認識、そして誠実なキリスト教に適切に導かれることである。そのため、彼らと一緒に熱心に祈りを捧げるだけでなく、毎日教会と学校で神の言葉とルターのカテキズムが教えられる。その際、彼らは自分たちの心そのものから、天におられる神、彼らの父に、聖霊、神の恵み、知識、信仰、愛、従順などを求め、イエス・キリストの名において祈る習慣を身につける。そして、学んだ聖書の箴言を適切で敬虔な祈りに取り入れることも同時に行う。

VIII.

したがって学びが勧められていない子どもたちでも、ルターのカテキズムを暗記している場合には、学校で教えられることに加えて、次に示すように毎日、祈りの一時間前に特定の教理問答者によってカテキズムを通じて教授される。その後、彼らと他の子どもたちは、教師たちによって一緒に祈りの時間に導かれる。そこで前回の説教が教理問答的に繰り返されるか、またはカテキズムからの一部がテストされる。彼らがドイツの歌も理解できるようにするために、土曜日の祈りの時間に、翌日曜日に歌われる歌が教理問答的に説明される。

XI.

これらの学校で行われる別のことは、子どもたちがアルファベット、綴り、読み書き、計算などを明確な方法で教わることである。その詳細は後に続く。それゆえ、三歳から四歳の一部の年少の子どもたちが綴りを覚えるだけでなく、非常に上手に読むことができ、さらに週に一度はことわざを覚えることさえある。

XII.

しかし最初の、孤児たちの三つの学校またはクラス、その中には市民の子どもも含まれているが、ここではすでにラテン語での読み書きに加えて、活用もできる少年たちのみが受け入れられる。そして彼らは必要ならばさらに勉強することになるはずであり、そうなればキリスト教の基本的な教えに加えて、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語の三つの主要な言語で十分に教育されることになる。特に最初のクラスにいる者たちの中には、ラテン語ではかなりの演習を行うだけでなく、ギリシャ語では新約聖書を、ヘブライ語ではモーセの書と詩篇を説明できる者もいる。さらに彼らは単なる書き方や計算だけでなく、歴史、地理、自然学、植物学、音楽、数学についても、ときおり特定の時間に教育を受ける。

現在、八人の孤児の少年たちがアラビア語も学んでおり、すでにかかなりの進歩を遂げている。

XIV.

孤児の家に属する一般の学校についても注意すべき点がある。そこで教育を受けるすべての子どもたちには、週ごとに元気づけるための楽しみが提供されていることである。なぜなら、土曜日、祈りの一時間前に、彼らは教師と一緒に、教区の近くの中庭か孤児の家の食堂に集まり、そこで監督が最初に彼らと一緒に歌を歌い、次に翌日の福音書や手紙を簡単に教理問答的に説明し、その利点を示し、それに続いていくつかの歌の詩で終わるからである。そして時間が許すなら祈りも行い、これによって翌日の日曜日に備える準備をする。これが終わると、すべての子どもたちにパンまたは梨、プラムなどの果物、そしてもっともよいものが配られる。特に年少の子どもたちはこれに大喜びする。そのため善意ある人々の心はしばしば揺り動かされ、パンや果物の配布に寄付を行うことがあり、これによって彼らも、そのような子どもたちの喜びと励ましに参加したいと望むようになる。

特にドイツ語学校で守らねばならないこと

1. すべての時間に取り組むべき内容と、各時間にどのような方法で進めるべきか

Was in allen Stunden zu tractieren und mit welcher Methode in jeder Stunde zu verfahren ist

午前一時間目

I.

最初の授業は、復活祭から聖ミカエルの日〔9月27日〕までの期間、午前七時から八時まで行われ、ミカエルの日から復活祭までの期間は午前八時から九時までである。そのため冬季には子どもたちは午前11時に、夏季には午前10時に学校を終える。

II.

最初の授業は常に以下のように行われる。その中で、1. 朝の歌が歌われ、2. 祈りが捧げられ、3. 新約聖書からの章が読まれ、4. カテキズムから主要な部分が復習される。

午前二時間目

I.

これは子どもたちが異なる授業を受けるため、次のように分けられる。最初の30分は年少の子どもたちとの読書にあてられる。それには四つのクラスがある。1. アルファベットを学ぶ子どもたち、2. アルファベットの本で綴りを覚える子どもたち、3. カテキズムで綴りを覚える子どもたち、4. 読み方を学ぶ子どもたち、である。最初に、綴りができる子どもたちに対して教師は彼らに課題を与え、それに備えるように静かに

進められ、そのあいだ他のクラスが終了するまで、大きく騒ぐことなく静かに準備する。それから教師は、まだアルファベットを完全に覚えていない最年少の子どもたちと一緒に指導し、黒板に導く。黒板にはつきりと大きく描かれたアルファベットがあり、教師は親しみやすく、棒を使って子どもたちにアルファベットを示し、それを読み上げさせる。それから彼らは黒板をじっと見続け、その後に黒板に描かれたアルファベットをアルファベットの本で探し、その間に他のことを手で行ったり、気を取られたりしないように指導される。このとき教師は特に全く無知な子どもたちに注意を払い、他の誰よりもまず彼らにアルファベットを繰り返し言わせるようにし、彼らを取り残されないようにする。

午前三時間目

I.

子どもたちは異なる授業を受けているため、再びそれぞれ異なる形で行われる。最初の30分では、小さい子どもたちと一緒に、週ごとに手渡される聖書の箴言を扱う。これらの箴言は通常、毎日の夕方の祈りの時間に再び取り上げられる。

午後一時間目

I.

子どもは午前中に祈りを捧げた後、同じ場所に戻り、心からの祈りを捧げる。子どもは神に、学業と学習に祝福を与えるようにとの祈りを捧げ、その後に主の祈り、信仰告白、栄光ある神よ、父なる主よ、等々さまざまな祈りを唱える。最初の授業で告げられたように、祈りは教師が行うこともできる。祈りが子どもまたは教師のどちらかによって行われると、他の子どもたちは立ち上がり、注意と熱心さを示すように喚起される。その後、もし都合がよく時間が許すなら、新約聖書の章が、最初の授業で説明した方法と同じように読まれる。また、しばしば旧約聖書からの章を読むこともできるし、他の子どもたちはそれを注意深く聞くべきである。もし午後にそれができない場合、週に一度、具体的には朝の授業の中で、旧約聖書から一章が読まれることもある。

II.

総じて、教師は聖書を読み上げる際に、子どもたちに神聖な神の言葉を正しく尊重する態度を植えつけ、彼らに自分たちの義務を強調して教えることを心掛けるべきである。これにより子どもたちは、次のことを認識しなければならない。神聖な言葉に対する適切な態度でもって神の聖書が要求する通りに信じて生きる必要があること、それこそ子どもたちが神の子と呼ばれるために必要であること、一生涯にわたって神の言葉をもっとも尊い宝として保持すべきであること、である。教師はまた、読まれる各聖書の内容や、ときおり示される旧約と新約の区分を教えねばならない。

III.

もし教師が午前中に、多くの子どもたちのゆえにカテキズムを扱う時間がなかった場合、今は聖書からの章の読み上げを省略し、代わりにカテキズムを他の午前中の時間に説明した方法で、子どもたちと詳細に確認もできる。

IV.

これが早く行われたなら、読解ができる大きな子どもたちが学んでいる学校では、月曜日、火曜日、木曜日、金曜日に算術が、水曜日と土曜日には音楽が教えられる。しかし、年長の子どもたちと年少の子どもたちが同時に学んでいる学校では、算術と歌が行われている際に、同時にアルファベットの綴りと読み方を教える別の教師がいる必要がある。ただし、同じ教室で両方をうまく行うのは難しいため、年長の子どもたちが計算と歌

を行う際に、年少の子どもたちを別の場所で独自に教えることもできる。これは夏季にはうまくいく。夏は屋内にすることが望ましくないからである。しかし冬季には、子どもたちはみな温かい部屋にいないため、このような分離は適していない。その場合、できる限りの方法で対処する必要がある。このため貧しい学校から二つの特別な学校をつくり、一つでは年長の子どもたちを、もう一つでは年少の子どもたちを特に教育する。これにより、どちらのグループも十分に教育を受けることができるようになる。

V.

算術〔算数〕の授業には、読解ができるすべての子どもたちが参加する。これは以下の方法で進められる。

VI.

算術の授業では、経験が示すように、異なる才能を持つ生徒が同じクラスで教えられ、一人が他の者よりも計算が速い場合、進度が遅い生徒によって妨げられることがあるため、これまで他の方法を試みる必要があった。具体的には、さまざまな種類の問題が含まれている印刷された算術の教科書が使用される。これには形、三角形の法則、実践問題、その他のものが含まれ、中でもトビアス・ボイテル〔Tobias Beutel, 1627-1690, ドレスデンで活躍した数学者〕の算術の教科書が特に適している。同じく算術の教師は活動的でなければならず、各生徒に算術を教える。

VII.

この算術の教科書では、教師は子どもたちに課題を読み上げる必要がなく、代わりに各々の子どもがボイテルの算術の教科書から問題を写して、その後、静かに各例題を解くことができる。その間に、教師は子どもたちの周りを歩き回り、各人が何をしているかを見守り、誰か進まないか、あるいは誤りがある場合には、それを指摘して手助けする。

VIII.

ただし、教師は一度にすべての子どもたちを手助けできないので、各子どもは順番を待たなければならない。しかし、自力で進められない子どもたちが無駄な時間を過ごさないように、教師がすぐに手助けできない場合は、その間に解かれた問題を清書するようしておき、教師が彼らのところに来るまで待つことが求められる。一部の子どもたちは他の子どもたちが手助けされている間に怠けて計算をしないことがあるため、子どもたちはすべての算術の授業で日付を教科書に書き込まねばならない。これにより、算術の教科書が土曜日にチェックされる際、どの子どもが怠惰であり、どの子どもが勤勉であるかをすぐに判断できるようになる。

IX.

いわゆる九九〔かけ算〕は重要であるため、算術の授業が始まるたびに、子どもたちの中から一人がこれをはっきりと暗唱するか、声に出して読み、他の子どもたちはそれを静かに繰り返し返さなければならない。これにより、子どもたちは知らない間にそれを学び、特に短時間で覚える必要がなくなり、計算から嫌気を感じる事がなくなる。

X.

ボイテルの算術の教科書には、未知の数値が含まれている場合がある。この場合、算術の教師はこれらの数値にターレル、グルデン、ポンド、ツェントナーなど〔金銭や重量の名称〕を付加して、名前をつけることができる。これにより、子どもたちはすぐに算術の計算の利点を理解することができる。毎時間、生徒は理解している計算方法で、黒板に問題を出すことができる。ただし、毎日順番に異なる生徒が担当し、九九を暗唱できる生徒はすぐに行うことができる。

XI.

ポイテルの算術の教科書を教師自身が計算して見せれば，子どもたちをより迅速に手助けできるだろう。

XII.

実践問題に関しては，算術教師は特にストルンツ〔ケムニッツの牧師〕の算術教科書を使用することができる。なぜなら，その中ではそのような計算が専門的に扱われているからであり，これにより彼は子どもたちにより明確に教えることができる。

XIII.

もしも，ある子どもがポイテルの算術の教科書を終えた場合，算術のさまざまな部分で追加の例題を与え，解かせることができる。これにより，子どもは単にすべてを繰り返すだけでなく，より多くのことを忘れるにくくなる。

XIV.

生徒たちが疑問を持っている場合は，自由にそれを提起する権利を持っている。なぜなら，彼らがすぐにすべてを理解できるわけではないからである。教師は生徒の疑問を辛抱強く聞き，優しく教えねばならない。ただし一度に一人だけ話させ，その疑問が解決されると，次に別の生徒にも耳を傾けるべきである。教師は頻繁に子どもたちに対して算術における勤勉さを奨励し，それが人生においてどれほど大きな利益があるかを説明すべきである。

XV.

水曜日と土曜日の最初の午後の授業では，音楽が行われる。女子たちと一緒に，教師は教会の歌をゆっくりと静かに歌う方法を教える。それにより，歌の歌詞と旋律の両方を正確に理解し，できるだけ短時間でそれらの正しい理解も指導される。少年学校では，ムジカ・フィグラータ〔装飾音〕の基本原則も教えられる。これは，経験豊富な音楽家が提案した方法に基づいている。

XVIII.

音楽の原理は，教師が少年たちに最短かつもっとも簡単な方法で教え，最初は必要最小限の知識だけを教え，すぐに歌の練習に進み，生徒たちが熱心に参加できるようにする。これにより，彼らは短期間でいくつかの歌を歌うことを学び，歌の芸術の利点を認識することで，残りの基本原則を学ぶことにも興味を持つであろう。残りの原理も，できるだけ簡潔かつ楽しく教えるべきである。最初に，教師は生徒たちにリズムを紹介する（これは半時間でできるだろう）。その後，すぐに彼らと一緒に音符を上下に歌うが，大きな音程は使わずに行う。その際，教師は三度の音程でも用いないようにし，最初は単純に音階を段階的に導き，それを継続していく。そして，それぞれが正確に声を一つの音から別の音に続けられるようになるまで続ける。その結果，彼らは半音短くも長くもなく，またすべての音符を正確に歌うことができるようになる。これが最初の練習となるべきである。これが彼らにとってより簡単になるように，教師は音符の上に c, d などの文字を書き，一種類の音符だけを使用し，歌で他の音符の形が出てくることについて一切言及しないようにする。

XIX.

各音の音色を正確に学ぶために，教師が歌の授業でフルートや，正確に音を表現するハーブ，または他の明るく鳴る楽器を使用するのは，非常に有益である。こうして，教師はフルートや他の楽器で音符をゆっくり

とはっきりと鳴らし、そしてそれを生徒たちと一緒に歌う。これを毎回の授業で何度か繰り返し、歌と笛吹き、または演奏を交互に行う。

XX.

それから生徒たちが数時間音符を上記の方法で歌った後、教師は即座に彼らにテキストを音符の下に配置する方法を示すべきである。すぐに彼らは音符を学び、歌う際に重要なのは何かを理解するようになる。歌詞に合う音符はなくとも、教師はそれに惑わされず、しかし適する言葉を書いて教えるべきである。音符と歌詞を交互に歌わせると、生徒は疲れにくく飽きずにすむ。それが無い場合、音符だけを繰り返し歌わなければならないとなると、すぐに生徒たちは飽きてしまう。

XXI.

教師が、練習によって生徒たちが音を正確に学んでいることを見いだしたなら、ますます半音を教え、少し練習させた後、さらに音程を紹介すべきである。ただし後者に関しては、異なる種類の音程を示し、その名前を教えるだけで十分である。通常のラテン語の名称、たとえば三度、四度、五度などを使用することはできるが、同時にそれがドイツ語で何を意味するのか、なぜ各音程がその特定の名前で呼ばれるのか、教えるべきである。しかし、この時点で教師は今回の授業での音程の教えに限定し、それ以上の時間を費やさないようにすべきである。彼らがすべての音程を完璧に練習できるまで、その練習を続けようとはせず、すぐに本題に移り、生徒たちに既知の一種類の音符を使用して、彼らがよく知っている教会の歌のメロディーを黒板に書き、一緒に歌う。これにより、生徒たちは音符の用途をすぐに理解し、既知のメロディーを歌うことで、音程に対するよりよい判断を得ることができる。このような既知のメロディーで一定の期間練習させ、毎時間または都合に応じて二時間ごとに新しいメロディーを書き込むようにすべきである。これにより彼らは徐々に音程の習慣を身につけ、それらのいくつかを正確に把握するようになるだろう。その後、教師は生徒たちに教会の賛美歌の未知のメロディーを指示し（ただし、まだ同じ種類の音符を使用して）、それで練習させるべきである。それまでに教師はすべての生徒を指導、少なくとも歌の授業からしかるべき利益を得られるようにすべきである。これにより生徒たちは一生涯、知らないメロディーがある場合には、それに対応する音符（多くの賛美歌集に見られるような）から助けを得て、そのメロディーを学ぶことができるようになる。

XXII.

しかし、歌唱に優れた才能がある生徒で、歌の授業で順調に進んでいる場合、それ以上に進んで、特別なクラスで指導されるべきである。そこで、教師は彼らに対して休符を含む異なる種類の音符を紹介し、各音符に適切なテンポを与え、拍子に従って歌う方法を教えるべきである。その後、教師は生徒の声を評価し、それに基づいて二つのクラスに分けるべきである。一つはソプラノ、もう一つはアルトで、それぞれが美しい宗教的なアリアで練習すべきである。その後、教師はそれぞれの生徒のアルトとソプラノの声を指導し、クラスごとに歌わせるべきである。それぞれの声部にかなりの数の生徒がいる場合、二人の教師が配置され、それぞれの声部を別々の部屋で指導すべきである。一方でソプラノ、もう一方でアルトを教え、お互いに交互に切り替えなくても、各グループは妨げなく一時間中に練習できる。しかし、彼らが指定されたアリアのメロディーを知っている場合、両クラスは一緒になり、それぞれの教師の監督の下で歌を歌い、一緒に演奏する。これに際して注意すべきなのは、アルトの生徒たちに対しては、ソプラノの生徒たちが演奏する予定のアリアの中にバスが含まれていて、それをアルトの声部に書き込んで学習できるということである。アルトの学生たちはそれをバスパートとして歌いこむことができる。彼らにとっては、自分たちの中にバスがないため、バスまたは基底部分に代わるハーモニーとなる。

XXIII.

最初に彼らと歌うアリアは、すべて均等な拍子でなければならず、少年たちは同じ拍子に慣れ、三連符の拍子が紹介されるまでそれで練習すべきである。こうして彼らは均等な拍子に慣れ、三連符の拍子に不規則な音符の数が現れることで混乱しないようにする。それが確立されたら、混乱の心配はなく、彼らを三連符の拍子に導くことができる。

XXIV.

一般的に教師は、声楽の指導において、少年たちにアリアのメロディーを書き記した場合、彼らにそのメロディーが完璧にできるまで、リズムまたは音程、あるいはテキストを同時に歌わせず、音符だけを独りで歌わせるべきである。なぜなら、まだ完璧な歌手のように訓練されていないため、彼らの感覚が熟練したものではないと、歌詞を見てしまいがちだから。しかし歌詞を暗記できるようになれば、少しは早くメロディーに組み込むことができるだろう。ただし、まずは音符の歌唱に慣れる必要がある。

XXV.

さらに注意すべきは、少年たちが常に全員が同時に歌うのではなく、ときおりいくつかの少年が単独で試されなければならないことである。そして、もし彼らがそれをうまくできない場合、教師は謙虚に友好的に援助すべきである。

XXVI.

最後に、アリアを歌う段階に達した各少年は、通常の帳簿のような形式の冊子を持っているべきである。その中に彼は学んだすべてのアリアを記録し、テキストをきちんと整理すべきであり、教師はそれを正しく行うように指示し、またその冊子を継続的に注意深く見るようにと指導すべきである。これによって彼らが試験の際にその状態で冊子を提示し、その中から歌を始めることができるようになる。

XXVII.

前述のように、週に4日、午後の最初の時間に算術が行われる場合、年長の生徒たちは、何か計算されたことが示されて、それが十分に理解された場合、それを静かに黒板で一つずつ繰り返すことができる。その一方で、教師は年少の生徒たちをアルファベットの板に導き、彼らに読み聞かせをし、そして年長の生徒たちと年少の生徒たちとを、一度、二度、またはそれ以上と交互に進める。しかし音楽の授業では、教師は年少の生徒たちに特別な活動をさせることはできない。代わりに、彼らに対して静かで聞くように促すだけである。

午後二時間目

I.

最初に、年少の生徒たちは黒板に導かれ、朝の時間と同じように読む練習を行う。その間に年長の生徒たちは、家ですでに学び始めていた文句を黒板で反復し、仕上げで覚えるように指示される。

午後三時間目

I.

この時間になると、すべての年長の生徒たちは、指定された教理問答者のもとに行き、彼と一緒にカテキズムと新約聖書を学ぶ。最初にカテキズムが取り上げられ、そしてそれが数週間で終了した後、新約聖

書も簡単に扱われ、その両方が年に数回復習される。しかし、冬の短い日々で共同の祈りの時間が午後三時に始まる場合、この教理問答はしばらく中断され、日が再び長くなるまで再開されない。その代わりに、各教師は自分の学校でカテキズムを一層熱心に進めなければならない。

VIII.

祈りで開始したなら、祈りで終了しなければならない。夜も朝と同様の手順で進められる。その後、すべてのクラスから子どもたちは共同の祈りの時間に案内され、特定の日には教理問答で行われた説教が繰り返され、それ以外の日にはカテキズムが取り上げられる。教理問答の後に歌が歌われ、その後に聖書の一節が読まれ、そこからいくつかの教訓と戒めが引き出され、再び祈りが捧げられ、最後に歌で終了する。その間、子どもたちは静かに座っているか、立っており、歌に参加し、聞き入っている。祈りの後、教会学校以外のすべての学校の子どもたちは教師に連れられて、教区教会の隣の庭に行く。そこで彼らに対して祈りの時間で何を覚え、心にとどめたかについて簡単に尋ねられる。その後、孤児たちは担当の教師に連れられて自分たちの家に戻るが、他の子どもたちは家に帰る際に、静かで礼儀正しく帰ることを心にとどめることになる。

2. 教師が注意すべきこと

Was von denen Informatoribus zu observieren

1. 主たる目的が十分に守られねばならない

教師は、特にすべてのことにおいて主な目的に焦点を当てべきである。それは子どもたちが真の、かつ生きた神と救い主イエス・キリストの認識に導かれることであり、そのことについて確信を持つべきである。おのおのの魂は、その面倒を見る者にとっては、自分の魂と結びつけられるべきである。つまり、彼らの手から失われたいかなる子どもの血〔生命〕に対しても、その原因がその者の過失や故意な放置によるものであれば、神はその責任を彼〔教師〕に問うことになるのである。

2. 自己検証が必要である

したがって、各自は自らが自分のキリスト教に正しい基盤が築かれているかどうか、よく検証すべきである。それによって若者は、教師からキリスト教の教えの始まりだけでなく、また彼を実例とし、それ従うことができるような模範となるだろう。彼は自分のすべての行動や態度を、単に人を喜ばせるためだけでなく、むしろ神の前での真実にかなうものとしなければならない。だからこそ教師として選ばれるのは、信頼がおける人物に限られる。もし彼がある期間、外見だけの偽りの信仰深さを演じるなら、彼〔教師〕自身がより重い責任を負うことになるだろう。

3. 善良な理由があれば、雇われ者のような態度はなくなる

正しいキリスト教の基盤が彼らに確立されているなら、彼らは自分たちだけの利益を求めたり、仕事を重荷として見なしたりするような、雇われ者の態度は持たないだろう。彼らは若者のために努力するだけでなく、彼らを信頼する子羊たちの、真実で忠実な牧者であり続けるだろう。彼らがここでそのように働くなら、そのように彼らはその日にイエス・キリストという大牧者から恩みの報酬を受けるだろう。しかし、もし彼らが学校の仕事を嫌々、ただ苦役として喜びもなく、忠実で勤勉に報酬を求めず、ただ神の栄光と子どもたちの最善のために行うことをしないなら、彼らは自らの手でそれを奪ってしまうことになる。

4. 信仰と祈り

彼らは委ねられた仕事において、自分の力や器用さ (eigene Kräfte und Geschicklichkeit) に頼るのでは

なく、あらゆる誠実さをもって、神の力強い援助と祝福に唯一無二の信頼を置くべきであり、したがって子どもたちを心にとどめ、常に神の前で思い起こし、彼らの永遠の繁栄のために熱心に祈り、神に自分たちの仕事の成功を謙遜に求めるべきである。

5. 父親のような心

一般的にしばしば起こることだが、多くの人々は十分な経験や真の神への愛の不足から、善いことを外部からの厳しいしつけ〔訓育〕によって強制しようとする傾向がある。しかし、委ねられた者たちを愛の精神で正しく理解し、父親の誠実さ、忍耐、寛容さで彼らの心を善へと傾けることが大切である。したがって、訓育者〔懲らしめ・しつけ役〕(Zuchtmeister)ではなく父であるよう努めるべきであるが、とりわけ若い時期においては、そのような父親的な心と真のキリスト者的な柔和さは、非常にまれにしか見られない。したがって、教師たちは熱心で謙虚に神に祈り願うべきである。神よ、彼らに委ねられた若者に対して、自分たちにそうした父親の心を与え、そして若者からあらゆる無謀な性格や厳しさを取り去ってください、と。そうすれば、彼らは確かに神の祝福を受けることだろう。特に、彼らが子どもたちに対してそのような父親の心を持つだけでなく、互いに真に兄弟的な愛を持っている場合、お互いに学び、思い出し、そして若者の教育の仕事を、真にキリスト教的な一致のもとで進めることができるだろう。同じ理由で教師は、不機嫌ではなく優しくあるべきである。しかし、委ねられた若者に対しては常に真剣であり、むしろ怒りっぽくなく、騒がしさや叫び声ではなく、むしろこうしたやり方を通じて、若者に適切な静けさをもたらそうと努めるべきである。そして彼らもまた、そのような公正な父親の愛を教えるだろう。つまり子どもたちの間で差別せず、一人と同じようにもう一人とも同じように接するべきである。そして、どちらも忠実に教え、戒め、罰する一方で、あらゆる忍耐をもって対処すべきである。しかし、もし彼らが子どもたちに対して不忍耐から牛、ロバ、愚か者などと呼んだり、悪口を言ったり不適切な言葉を使ったりしようとするなら、そうした父親の愛とは全く合致しない。それによって若者の真の改善は期待できない。

6. および 7. 厳しさの中でも慎重でなければならない

したがって彼らは父親のようなしつけと愛情深い注意をもって、子どもたちの魂に対して見守り、戒めや罰を怠らず行うべきである。しかし、できるだけ厳しさや厳格さによる教育を行わず、怒りの感情に対しては最小限にして、むしろあらゆる柔和さや優しさをもって取り組むべきである。キリスト・イエスにおける神の愛を彼らに示し、それによって信仰を彼らの中に喚起し、神の言葉への愉しみと愛、神の前での子どもらしい畏怖を、彼らの心に植えつけるべきである。

教師は杖を使うべきではない。最低でも三度の警告や口頭での罰が先行し、または明らかな悪事が感知されない限り。なぜなら、子どもたちは学ぶためではなく、主に悪事により、特に嘘をついた場合には、罰せられるべきだからである。しかし、教師はそのような場合でも杖を適度に使用すべきで、子どもたちがあまりに厳格なしつけによって、完全に怖気づかないようにすべきである。彼らは子どもたちに対して、前もって彼らの罪をきちんと説明すべきである。それによって、彼らがなぜ罰せられるのかを知るためである。また、犯された悪事に対する特別な罰が行われる場合には、他の人にその事例を示し、教師たちが杖で罰することをどれほど嫌っているか、そしてもし生徒たちが言葉で教育されることができれば、むしろ喜んで杖を捨てたいと思っていることを証明すべきである。また、彼らは〔杖による〕しつけを受けた後に手を差し伸ださせ、感謝の意を表させ、改善を誓約させるべきである。

8. 罰を与える前には、自分を神に託すべきである

必要な罰を与える前に、彼らは心から神に嘆願すべきである。彼らに、そのために必要な知恵を授けてくださるように、と。それによって教師たちは肉的な怒りではなく、慈悲深い愛情として、父親のように

それを行うことができるようになる。神がそのために祝福と成功を与えてくださるように願い、求められる最終目標である、子どもたちの改善が達成されるようになることを願うのである。

9. 助言は穏やかに受け入れられるべきである

もし教師たちがここで出来事に対して過度な行動をとり、そのために助言されるべきであると感じた場合には、それを柔和に受け入れ、より慎重になるべきである。しかし、その後で事態を悪化させ、その代償を子どもたちに払わせるべきではない。

10. 深刻な過失の処罰

しかし、ある子どもが何か重大な過失を犯した場合、教師(Praeceptor)はそれを詳細に手帳に記録し、週に一度行われる視察(Visitation)の際に視学官(Inspector)に見せるべきである。こうして視学官の指示に従って処罰が行われ、公然とした注意が付加されるようになり、それによって子どもたちに対してより強い印象を与えることができる。

11. 不適切な時期の称賛は避けなければならない

しかし、うまくやっている子どもたちに関しては、教師はこれを不適切な時期に賞賛して、彼らを誇らしく〔自惚れ〕させてはならない。そうした誉め言葉によって、彼らの中の良い部分を台無しにするのではなく、むしろ彼らに対してより頻繁かつ愛情豊かに、親切に、素晴らしい約束を伝えるべきである。彼らには、この世とあの世の両方で敬虔な生を送る者がどのように見えるかを示し、同様にキリストが子どもたちに対して持つ心からの愛も少なくはないことを示すのである。それによって彼らはますます心からの愛に目覚め、さらに励まされることになる。そして喜びと歓喜をもって教会と学校に通い、あらゆる従順を示し、同様の福音的な理由によって、不品行者たちも良い方向に向かうようになるだろう。

12. 青年の欲望に対しては誠実に警告すべきである

若者の欲望については、一般にすべての子どもに対して警告すべきであるが、特に青年期にこれはもっとも表に現れ始め、これについて慎重に警告すべきである。これにより、早いうちに彼らの魂の中に、すべての非神的存在を真に拒絶する基盤が植えつけられるようになる。最終的には、特に神的な言葉の基盤から彼らに示すべきである。彼らがこの世で拒絶できないものをキリストの中で、より輝かしく再発見できるはずはないということ。これによって、真のキリスト教の本質について正当な基盤を同時に獲得できるようになる。

13. 子どもたちは親に対してどのような心構えを持つべきであるか

残念ながらよくあることであるが、子どもたちは悪いことをしたとき、しばしば自分の行動について、親や親代わりの実例を引き合いに出すことがある。したがって、教師たちはそのような場合、子どもたちに示すべきである。神の言葉を生涯の基準とし、救い主が私たちの行動と態度のすべての手本と模範である。と。一般的には悪い実例から警告すべきであるが、親を子どもたちの前で軽く見てはならない。それよりもむしろ、いつも子どもたちには、どのようにして親に対処すべきかを示すべきである。

14. 道徳について

彼らは子どもたちをモラルと行儀作法について細かく指導し、他の人に対して上品で敬意を表す方法を教えるべきである。

15. 乞食の子どもたちについて

それまで扉の前で物乞いをしていたり，今でもしていたりする子どもたちには，一生物乞いのパンを食べるのではなく，何か有益なことを学ぶことがいかに重要かを熱心に教え込むべきである。こうして彼らは隣人に奉仕し，神の意志に従って生きることができるようになり，彼らに希望を持たせることができるようになる。神を畏怖し，勤勉に学ぶなら，彼らの世話をし，良い職業に就かせたい。また，ときおり彼らに貧しい子どもが有益で善良な人になり，また身体的にも神によって祝福された実例を，いくつか話すことができる。

16. および 17. 乞食の人々の罪について

物乞いをすることで犯される罪について，彼らに熱心に説明することが必要である。たとえば，それが必要からでなく，または人が物乞いを通じてお金や財産を集めようとしたり，集めたものを無駄に浪費したり，物乞いを職業にしたり，学校や教会に行くのを怠るようになったり，あるいは神の言葉よりもパン一つのほうが大事だと思ふようになったり，ということについて。

しかし，物乞いの中でよくある罪をあまり詳しく説明すべきではない。そのような説明から悪を初めて学び，それよって彼らに語られたとおりに行動する者が出ないようにするためである。神のわざは素晴らしく称賛されるべきであるが，悪魔の行いについては非常に慎重に話す必要がある。なぜなら，その引火点は人間の心にあり，そこでは簡単に着火してしまうからである。

18. 物乞いの子どもたちに特に力を入れるべきである

教師は，特に物乞いの子どもたちが早いうちにキリスト教の教義の善良な基盤を築くよう熱心に取り組むべきである。なぜなら，彼らがどれだけ長く学校に通うかは，あまり確かではないからである。

19. 訓令〔規定〕は正確に順守されねばならない

教師は，与えられた学校規則と訓令に従い，自分の好みによって変更してはならない。ただし，何かが改善されると思う場合は，それを書き起こして視学官に提出してよい。週ごとの会議で視学官に報告し，他の教師たちにもそのことを聞かせるべきである。そして，何も重大な異議がなければ，それを監督者〔校長〕(Director)に開示し，必要または有益と認められた緩和策を監督者の同意を得て導入し，後に続く者たちのために学校規則にも注記されるべきである。

20. 祈りは熱心であるべきである

学校規則によれば，毎回の始まりと終わりに行われる祈りは，真摯な真剣さと適切な静けさの中で行われ，決して長すぎてはならない。

21. 子どもたちの記録簿

彼らは子どもたちの記録簿を作成し，いつ，どのような時期に学校に入学したか，名前は何か，親は誰か，年齢はいくつか，学校に入学した際に何ができたかなどを書き込むべきである。同様に，彼らが学校を完全に離れ，別れる際に学んできたことやこれまでに学んだことは，記録すべきである。これらすべては，試験の際に提示できる表に適切にまとめられるべきである。

22. 子どもたちの心情が理解されねばならない

また，彼らは神に知恵を求め，子どもたちの心情を理解し，区別することを学べるように祈るべきである。それによって，彼らはそれぞれの子どものをどのように引きつけ，それに対してより柔らかく，または厳し

く対処すべきかを、より良く知ることができる。また、彼らが子どもたちの精神の能力や、特にそれぞれの子どもが何に適しているかを認識して、神がそれぞれの子どもに授けた賜物を適切に引き出し、共通の利益のために活用できるようにするためである。その後の試験では、彼らはそれぞれの子どもと才能に関する判断を前述の記録に追加し、そのあと視学官が試験を行った後に、それをきちんと添付する。

23. 学んだ知識の理解と実践をしっかりと刻み込む必要がある

彼らはできるだけ努力して、子どもたちがカテキズムと聖書の箴言の単なる言葉を覚えるだけでなく、それぞれの正しい理解も得られるようにすべきである。また、教師は常に実践に力を入れ、子どもたちにしっかりと教え込むべきである。知識だけでは十分でなく、彼らの生活全体がそれに合致する必要がある、ということを理解させるべきである。

24. 子どもたちの言語の誤りを防ぐべきである

また、彼らは子どもたちに注意し、はっきりと、つまり切り取られた言葉で急いで祈ったり、カテキズムを覚えたりしないように気をつけるべきである。なぜなら、こうした誤りが聖書の正しい理解と使用を妨げるからである。

25. 本は手元に置く

貧困層の学校のクラスでは、子どもたちは家に本を持ち帰ることはない。代わりに、それぞれの子どもが学校で本を受け取り、他の本が必要な場合は前の本を教師に返し、その後、別の本を彼から受け取るようにする。そして学校が終わるか、子どもが外に出る許可を求めると、教師はその子どもから本を回収し、学校が終わった後、すべての本を棚にしまう。それが教師の責任である。きちんと見張り、一冊でもなくならないようにしなければならない。

26. 子どもたち自身の本は戻される

貧困層の学校に通う子どもたちが自分の本を持参する場合、彼らには今後それを家に置いておくように言い、そこでそれを読むようにし、学校では必要な本を提供すると伝えられる。

27. 別れの際には本が一緒に渡される

ただし、子どもが学校から正式に卒業する場合、女子でも男子でも、つまり、家事や職人仕事に従事するほど成長している場合、学校の視学官から彼らには彼の本、要するに、教理問答書、詩篇、新約聖書が手渡され、それらを保管するようにと伝えられる。

28. 別れ方はどのようにしなければならないか

そのような子ども〔卒業生〕は、教師たち、学校視学官、および魂への配慮をしてくれた人々に正式な別れを告げ、世話になった良い訓育と指導に感謝の意を表すべきである。その後、今の善き教師が、これまでに聞いてきた良いことを卒業する子どもたちに思い出させて誠実に忠告し、それを信じて一生懸命に生き、約束し、宣誓させるべきである。その後、教師はすべての子どもたちを立たせて、その子どもの今の世と来たる世の幸福のために、また神がすべてのキリスト教の子どもの教育を、恩恵によってさらに祝福してくださるように、と子どもたちと共に心から祈りを捧げるべきである。最後に、教師は子どもに、学校を離れても、教会の公の教理問答を離れることなく、むしろそれに熱心に参加するように忠告すべきである。これにより、学校で学んだ教えを忘れないようにするのである。

29. 子どもたちは教師によって教会に導かれねばならない

各学校の子どもたちは、毎日の祈りの時間や教理問答だけでなく、日曜日や他の時間にも、教師たちによって導かれねばならない。彼らをきちんと教会に連れて行き、静かに注意を払い、神の普遍的存在を思い起こし、子どもたちがきちんと一緒にいて、教会に行くように見守るべきである。日曜日、午後の説教の後、彼らには学校規則の指示に従い、祈りの時間に入る前に、神の言葉から感動的なものや霊的な歴史が提示されるべきである。

30. 教師も彼らと一緒にいなければならない

子どもたちを教会に導く者は、礼拝時だけでなく、説教中も子どもたちと一緒にいて、注意を促し、誰もが離れたり他のいたずらをしたりしないように気をつけるべきである。

[31 は抜けている]

32. 教師は鐘が鳴る前に現れるべきである

教師たちは、各自自分のクラスに少し前に到着し、子どもたちが集まるのを待つべきである。それによって、学校が始まる前に、子どもたちが庭や教室でいろいろないたずらをしないように注意しなければならない。

33. 子どもたちには不適切な自由は許されない

教師は慎重に注意して、学校で子どもたちに不適切な自由を許さないようにしなければならない。たとえば、彼らが最前列の者たちと何かを企んでいる場合などである。最後尾の生徒がおしゃべりをしたり、無駄なことをしたり、果物を食べたりしないように、教師は特に注意を払わねばならない。教師は通知だけでなく、他のこと、たとえば書きものや本を読むことも慎むようにしなければならない。これは子どもたちに、自分たちも他のことを始めたり、あるいは不注意になったりするきっかけを与えるからである。

34. 子どもが現れない場合

もし子どもが欠席した場合、教師は即座に連絡をとり、その子どもがいる家庭または場所で、欠席の原因を尋ねなければならない。

35. 親とも話し合う必要がある

もし親が不必要に子どもを学校から遠ざけていることが分かった場合、教師はその親を訪れ、親しく話しかけるべきである。これにより、親は子どもたちの霊的な幸福と学習の妨げとならず、むしろ一層熱心に学校に通わせるようになるだろう。また、教師たちは機会を見て、親たちを訪れ、子どもたちが家庭でどのように振る舞っているか、自分の言葉で祈っているか、従順であるかなどを尋ねるべきである。これがうまくいけば、親と子どもたちには素晴らしい利益をもたらす、親と教師の間で生じるかもしれないいくつかの誤解も予防できる。

36. 週の説教には参加する必要がある

もし週の説教がある場合、前日に子どもたちに告げられ、説教の前に彼らは学校に集まり、そこで朝の祈りと共に集まり、そのあと通常の祈りの時間と同様に、教師によって教会に導かれる。説教の後、教師たちによって子どもたちは再び適切に学校に戻り、更に一時間の授業を受けるべきである。

37. 日曜日の説教

土曜日には子どもたちに対して、翌日曜日の朝にも同様に説教の前に学校で集まり、教師に導かれて教会に行くように伝えることができる。ただし、家庭のさまざまな事情で全員が来るわけではないし、厳格に強制されるべきではない。しかし、できるだけ多くの生徒がこれを守るように心がけるべきである。

38. 教師は他者に任せるべきではない

たとえば子どもたちに異なる教師がいて、一方の教師が他の教師が言いたいことを代わりに伝える場合、子どもたちの前でそのようなことが行われないように注意を払うべきである。

39. 縁日

たとえば年の市がある場合、子どもたちには前もって注意を喚起し、学校を休まないようにし、また市の広場で商人に会ったり、劇場に行ったりしないようにし、特に悪いことから身を守るようにする必要がある。

40. 祝日

もし重要な祝日がある場合、子どもたちにはその前に熱心に忠告し、祝日明けにすぐに学校に戻るよう促すべきである。そのために一週間も学校を休まないようにすべきである。

41. 悪い仲間との交際の予防

同様に、子どもたちが他の悪い仲間巻き込まれ、悪に誘惑される可能性がある場所や機会から、彼らをできるだけ遠ざけるよう心がける必要がある。これはしばしば教会の祭り、職人の宴会、および他の催しで発生することがある。

42. 清潔

また、各学校では清潔かつ整然とした状態を維持し、冬季には火の取り扱いに十分な注意を払い、部屋を適度で穏やかな温度に保つようにしなければならない。

43. 会議

すべての教師は週次の会議に熱心に参加し、重要な事情がない限り、それを欠席しないようにすべきである。また、週ごとの学費は土曜日に特定の時間に集めるべきである。

44. 旅行について

教師は、視学官の事前の了解なしに旅行することはできず、また彼の承認なしに他の教師を代わりに任命することもできない。

45. 別れの挨拶について

教師が教職を辞める場合、彼はこれまで教育してきた生徒たちと一緒に心から祈り、そして彼らに祝福を授けるべきである。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 22K00110 の助成を受けたものです。